

3群; 1及び2群と異なり, 8例中6例が発症前の自己の growth channel から, 糖尿病発症後, 2 channel以上下方(低身長方向)にずれて発育していた。これ等思春期の身長スパートの遅延が見られた症例の身長は3~25th percentile の間にあり, 糖尿病発症前の growth channel に従って思春期を経過した2症例は, それぞれ50及び80th percentile であった。糖尿病コントロールの状態はスパートの遅れた6例で fair 1例, poor 又は bad 5例であった。一方, 正常の思春期のスパートを示した2症例のコントロールは fair, bad 各1例ずつであった。

骨年齢/歴年齢は $<1$ ,  $1<$ の症例がほぼ同様であったが, 骨年齢/身長年齢では $<1$ の症例が $1\leq$ の症例の約3倍見られた。経時的に骨年齢を追跡した症例では骨年齢/身長年齢が徐々に増加して行く場合が多かった。

小 括 : 糖尿病が思春期以後に発症した場合, 或いは思春期以前に発症しても思春期迄の間は, 患児の身長発育が糖尿病のために大きく障害されることはないようであるが, 糖尿病患児として思春期を迎えた場合には, 思春期のスパートは遅延する傾向が窺えた。これが患児の最終身長に何等の影響をもたらすかについては今後の検討が必要と思われるが, 骨年齢との関係からみると, このような症例では最終身長にも影響は残るように思われる。

## 北海道における若年性糖尿病の現状

北海道大学医学部小児科 松浦 信夫  
福島 直樹  
阿部 和男

1973年, 北海道において第1回小児糖尿病サマーキャンプが開催されたのを機会に, 北海道におけるインスリン依存性若年性糖尿病の調査を行なって来た。本研究班の初年度の目的が, 若年性糖尿病の実態, 予後及び予後と治療の関係を調査することにあることから, 北海道における現状を報告し, 今後全国のそれと比較してみたいと思う。

1. 対象と方法 : 対象は北海道内で, 16歳未満に発症したインスリン依存性糖尿病である。毎年1月に道内各病院小児科及び糖尿病外来を行なっている内科医へのアンケート調査, サマーキャンプの参加者, 小児糖尿病協会会員より症例を把握した。

2. 年間発症数の変化 : 北海道在住の16歳未満の人口は約140万人, この内6~15歳の学童は84万人であり, ほぼ一定している。1973年の年間発症数は7例, 1980年のそれは26例であった。この

間1974, 1978年に小ピークがあるが、ほぼ直線的に発症数が増加している(図3)。1978年より男女の発症数は逆転し、男子の発症数が優位となっている(前掲の図3)。対象人口10万人当りの発症率は1980年で1.85であり、これはデンマークの14, スウェーデンの19.6, カナダ国モントリオール市の9.8に比しまだ低いが、毎年の増加が急なことから充分注意していかなければならないと考える。

3. 頻度 : 昭和55年12月31日現在、北海道内在住16歳未満の症例数は104名、内6~15歳の学童は97名であった。対象人口10万人当りの頻度は0~15歳で7.4, 6~15歳で11.5であった。これはアメリカの189, スウェーデンの130人に比し約1/10~1/16であった。

4. 発症年齢 : 発症年齢を性別にみると、4歳未満では男性、4~12歳で女性、13歳以上で男性発症が優位を占めていた。男性では13歳に、女性では小学校入学前後の6~7歳及び11~12歳にピークがみとめられ、両方を合わせると12歳で発症する症例数が最も多数を占めた。

5. 発症月 : 多飲, 多尿, 体重減少, 全身倦怠感等が出現してから診断されるまでの期間は1ヶ月位が多かった。診断日を月別にみると、2, 11, 3, 10月の順に多く、7, 5, 9, 8月の順に少なかった。すなわち冬期間に多く、夏期間に少ない傾向が明らかになった。

6. 家族歴 : 三親等以内に家族歴を有する頻度は26.2%, 一親等に認めるのは6.4%であった。兄弟発症は2家系にみとめられた。

7. その他 : 少なくとも3例は発症時、糖尿病性昏睡で死亡している。いずれも脳炎等の診断で、治療開始が遅れていた。1例は注射拒否で死亡している。

我々が今迄に確認出来た症例の総数は168例であった。今後全国調査を行なうことにより、我々が北海道でみとめた発症率の推移, 発症年齢, 月別発症, 遺伝歴等が他の地域においても同じ様にみられるのが興味のある所である。

## 小児糖尿病患者の成長障害の実態

大阪市立大学医学部小児科 一色 玄

近畿地区小児糖尿病サマーキャンプ参加希望者112名(男45名, 女67名)について罹患年数別に昭和52年度学校保健統計を基にした平均身長からの偏差値を求めた。その結果、罹患年数3年未満の群(20名)では平均身長は $-0.25$ SDにあり、1~3年群(34名)では $-0.42$ SD, 3~5年群(28名)では $-0.79$ SD, 5年以上の群では $-0.77$ SDにあった。すなわち平均して発症後3年までの間に低



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1973年,北海道において第1回小児糖尿病サマーキャンプが開催されたのを機会に,北海道におけるインスリン依存性若年性糖尿病の調査を行なって来た。本研究班の初年度の目的が,若年性糖尿病の実態,予後及び予後と治療の関係を調査することにあることから,北海道における現状を報告し,今後全国のそれと比較してみたいと思う。